

心理学史から見たヌーソロジーの位置付けと
ヌーソロジー研究の可能性
—アリストテレス的潮流・プラトンの潮流の変遷と
構造主義的超越論的無意識研究の系譜—
春井星乃

The Place of Noosology in the History of Psychology and
and the Possibility of Noosological Research
-The Transition of the Aristotelian and Platonic Currents and
Genealogy of the Structuralist Transcendentalist Study of the Unconscious

Hoshino Harui
(2022)

【キーワード】心理学史 超越論的無意識 構造主義 プシュケー アリストテレス プラ
トン 実験心理学 行動主義 ゲシュタルト心理学 精神分析 臨床心理学 人間性心理
学 トランスパーソナル心理学 ポジティブ心理学 現象学 物理学

I はじめに

心理学とは「心とは何か」を科学的に研究する学問であるが、この「心」を「どういうものと捉えるか」、そしてそれを「どのような方法論によって明らかにしようとするのか」という立場によって、その内容が大きく規定される。「心理学の過去は長いが歴史は短い」とよく言われるが、心理学誕生の背景とその歴史も、この「心」というものの捉え方と方法論の変遷の歴史とも言えるだろう。

本論文では、「心理学誕生の背景とその歴史」を「心」の捉え方と方法論という視点で今一度整理し、超越論的無意識構造の明確化を目指すヌーソロジーが、これまでの心理学史の中でどのように位置づけられるのかを提示することを第1の目的とする。その上で、ヌーソロジーにおける心理学研究の方法論を述べ、最後に心理学の今後の展望とヌーソロジーが心理学の発展に寄与する可能性についても考察してみたい。

II 心理学誕生以前の「心」の概念と方法論(古代ギリシャ哲学～キリスト教神学)

「心」という概念を学問的に記述しようという試みの最初の萌芽は、古代ギリシャ哲学のイオニア学派の中に見受けられる。イオニア学派においては、まだ明確な「心」という概念はなく、心理学 (Psychology) の語源でもあるギリシャ語の「プシュケー」、つまり<魂>という概念を使用して世界の成り立ちについて研究を行っていた。この「プシュケー」とは、

彼らによって「水」「空気」などと定義づけられる万物の根源「アルケー」が形を変えて人間の中に入り込んだものであり、これが抜け出してしまうと「死」を迎えるという、「命」と密接に結びついたものであった。

この「プシュケー」は個々人の<魂>という意味で使用されており、それを支える人類共通の世界靈魂とも言うべき「プネウマ」という概念が生じ、人間は、霊（プネウマ）魂（プシュケー）体（ソーマ）という3原理で捉えられるようになった。古代ギリシャ哲学では、「プシュケー」も「水」「空気」などの万物の根源から生じてくるものとされており、まだ明確に物質的なものと純粋に概念的なものの区別ができていない状態で使用されていた言葉と考えられる。「プシュケー」は「自然」＝万物の根源に従属しているものであり、「自然」の一部であるという考え方が基盤にあると言える。

このような世界観の中で、対照的な考えを展開するのがプラトンとアリストテレスである。プラトンは、「プシュケー」が「ソーマ」から解放され「イデア」の世界を直観することを人間の生の目的とする形而上学的宇宙観を提唱するが、アリストテレスは現実世界の現象を重視し「プシュケー」をあくまで自然学として研究した。このアリストテレスの姿勢こそがのちの科学的心理学の源流とも言えるのだが、この自然学的「プシュケー論」はやがて「プネウマ論」となってアレクサンドリアの医師や自然学者に引き継がれ、「プシュケー論」はキリスト教神学や形而上学の中に見られるのみとなっていく（高橋,2016）。

キリスト教神学が多くの人々の世界観を形作る時代になると、それまで「自然」に従属するものとされていた「プシュケー」が、今度は「神」に従属するものとされるようになる。「プシュケー」は、「神」に救済されるための方法を研究するために必要な概念として使用されるものとなっていったのである。つまり、キリスト教神学においては、あくまで「神」による救済への道筋の中のみ存在する「プシュケー」であって、現在我々が考える「心」のように、自ら考え独自に自然や人生に意味を見出す力を持つものとは考えられていなかった。さらに、それまで物質的なものと概念的なものが混ざり曖昧になっていた「プシュケー」が、「神」の介入によって純粋に概念的なものへと変貌を遂げたことも大きな意味を持つと言えるだろう。

そして、以上の古代ギリシャ哲学、キリスト教神学における「プシュケー」の研究方法は、それぞれの哲学者・神学者における「プシュケー」の定義の範囲内での直観や内観に始まる哲学的思索であり、現在の心理学の科学的、客観的な手法とは程遠い主観的な傾向の強いものであった。

Ⅲ 心理学の誕生とその系譜

1. デカルトの物心二元論と実験心理学の誕生

「心」の概念の歴史的変遷を見ていくとき、もっとも重要な転換点はデカルトによる「自

私の発見」だと言っていいだろう。それまでの前近代的、キリスト教神学的な「私」は、神の従属物である「プシケー」であったが、デカルトによって世界認識の起点である「自我」「理性」というものへと置き換わっていく。これにより、認識の起点である「自我」「理性」と、それを持たない空間的広がり（延長）に現象化した「物質」との「物心二元論」が人類共通の世界認識として広まっていった。それまで曖昧だった「心」と「物質」の境目がここで初めて明確に分けられたと言えるだろう。

また、前近代では「自然」・「神」・共同体によって与えられた身分や社会的秩序を「個人」が変更する可能性は初めからないものとされ、その可能性さえ考えられていなかったのだが、デカルトの「自我の発見」「物心二元論」により、人間は「自然」・「神」・共同体をどう扱うかという点でも自由意志を持ち、それまで介入不可能とされていた領域にも「理性」による客観的な方法論を用いて、その実態を知識や法則として明らかにしていくことができる存在となった。これにより、「心」は現在我々が考えている、「自然」にも「神」にも属さず「物質」とも明確に分離された、自由意志を持つ「心」となっていく。

この17世紀のデカルトの「自我の発見」「物心二元論」を基盤とし、ロックの経験主義、フェヒナーの精神物理学を経て誕生したのが、現代の科学的心理学の始祖とされるヴントの実験心理学である。一般的には、1879年にヴントがドイツのライプチヒ大学に心理学実験室を開いたことをもって心理学の誕生とされている。ヴントは「意識」を研究対象とし、そこに刺激提示（音など）を体系的に行う実験を取り入れ、結果を被験者の内観法（内面観察）によって報告させた。彼は、「意識」とは経験によって形作られ、経験は感覚・学習・感情などの要素の組み合わせだと考えたため要素主義と呼ばれている。

つまり、17世紀のデカルトによって「物質」との明確な違いが定義されて「心」の概念の精緻化がなされ、19世紀のヴントによって心理学の方法論に科学的手法である実験が取り入れられたのである。

2. 行動主義革命とゲシュタルト心理学、認知心理学

ヴントの実験心理学は内観法をベースにしていたため、被験者の主観が入り込むという批判が起こり、20世紀初頭、ワトソンは客観的な「行動」だけを研究対象とする行動主義を提唱した。ここで、デカルトによって「認識の起点」とされ自明のものとしていた「意識」「内面世界」を操作的概念の1つとして研究対象から排除してしまうという、決定的な認識の変化が起こったのである。これによって現在の科学的心理学に大きな影響を与える行動主義という立場では、「心」はあくまで他者から客観的に見える「行動」によってしか量り得ないものとなった。

また、人間の複雑な心理現象は要素に還元することはできないという要素主義への批判からは、全体性を重視するゲシュタルト心理学が生まれた。その後、行動だけでは「心」を正しく捉えることはできない、裏にある知覚や思考、記憶という認知過程を解明しようという

機運が生じ、認知心理学に発展していった。認知心理学は現代心理学の主流であるとされるが、その実験方法は行動主義同様、「内観」ではなく外に表れた「反応」を客観的に測定するというものなので、行動主義の影響を色濃く持つものであると言える。

3.精神分析とカント

20世紀の心理学の3大潮流は行動主義・ゲシュタルト心理学と精神分析であると言われている。精神分析の創始者フロイトは、主観的「心」を排除した行動主義とは正反対に、「心」の中に主観的にさえ意識できない「無意識」というものが存在するとした。そして、意識を支える「無意識の構造」を明らかにすることで、精神疾患を持つ患者の治療方法を構築しようとするのが精神分析である。現代心理学の基盤を形作る行動主義が前述のようにアリストテレス的なものならば、「アイデア」的な「無意識の構造」を探求する精神分析はプラトンのものを引き継いでいると言えるだろう。

「心」の研究は実験心理学の誕生以来、主観を排し客観を重視する流れで進んできたわけだが、ここに来てフロイトが「無意識の構造」を対象にしたのはどのような背景があるのだろうか。一般的には、ヴェントの要素主義のうち、意識だけを見るという特徴への批判として、無意識を研究する精神分析が生まれたとされることが多い。確かに心理学史だけを見るとそう見える面もあるのだが、哲学史、思想史を見ると、フロイトはカントの影響を大きく受けていると思われる。

カントは、前述のロックなどによる「自我は経験によって作られる」とする経験論とデカルトの「自我が世界認識の起点である」という立場を取る合理論の対立を踏まえ、それを調停するため「経験を自我に高める構造がある」とした。このような、経験や認識に先立って経験や認識自体を成立させる条件を探るという姿勢を「超越論的」といい、カントの哲学は超越論的哲学と呼ばれている。この超越論的姿勢は、精神分析の基本姿勢（精神疾患や治療関係を作り出している無意識的構造を見出し、それを利用して治療を行う）と非常に近い。実際、フロイトは若いころからカントの思想に傾倒し（池田,2011）、自身の超自我の概念をカントの定言命法と同一視していた（Freud,1923;工藤,2019）。つまり、精神分析は、それまでの心理学の潮流（経験主義・精神物理学からの実験心理学という流れ）から生じたものではなく、哲学の流れから生まれたものと考えの方がより本質に近いと言えるだろう。ただ、カントの哲学は、思考の対象として現象すべてを扱う範囲の広いものであり、その方法は哲学的思索であったのに対し、フロイトの精神分析は、対象を精神疾患とその基盤となる意識発達などに限定し、方法論的にも哲学的思索に加え、観察法を取り入れているところが心理学の一分野とされる由縁だろう。

4.臨床心理学の誕生

フロイトが研究活動を始めた19世紀後半、時を同じくして、精神疾患や不適応行動などの援助、回復、予防、その研究を目的とする臨床心理学の研究者が数多く生まれた。現在の

日本臨床心理学界で、臨床心理学の祖としてよく言われているのは、ヴントのもとで学んでいたウィトマーである。具体的には、ウィトマーが1896年にペンシルバニア大学に世界初の「psychological clinic（心理学的クリニック）」を創設したのもって臨床心理学の発足とされている。このクリニックでは、（1）学習に問題を抱える子供の治療（2）統計的手法と臨床的手法を両方用いて子供の発達を研究する（3）教育・医療・ソーシャルワークに従事する人に対して正常及び遅れのある子供の観察、訓練する実習の機会を与える（4）臨床心理学の専門家育成プログラムを提供することを行っていた（サトウ,2022.5）。サトウ（2022.8）は、精神分析や行動主義のワトソン、クレペリンなど同時多発的に起こっていた臨床心理学の芽生えがウィトマーの活動、研究に収束していると考えられるために、ウィトマーを臨床心理学の始まりとするのが適切だと述べている。

ウィトマーは、臨床心理学をプラトンの精神分析、アリストテレス的なものの極とも言える行動主義のどちらとも一線を画し、あくまで現場の実際の現象を観察することをメインとし、その観察データを客観的科学的に分析する学問であると捉えていた。とは言え、精神分析と比べれば、ウィトマーの臨床心理学も現実的現象を重視するアリストテレス的なものの流れを組んでいると言える。ウィトマーにとっての「心」はあくまで観察できるものではあったが、その対象は、行動主義のように実験結果や行動だけを抽出するのではなく、生活の現場における子供の言葉や表情の奥にある質的データまで含めた全体的データであったということだ。そして、方法論としては、それを客観的科学的な手法で分析することを重視した。精神分析と違うのはこの方法論と、「心」の概念の中に無意識構造の存在を考慮しないことである。

以前は臨床心理学の歴史をフロイトから始める書籍も多かったが、現在ではウィトマーが臨床心理学の祖とされている事実を見ても分かるように、現在の臨床心理学の主流にはウィトマー的な姿勢が引き継がれている。

5.人間性心理学・トランスパーソナル心理学からポジティブ心理学への流れ

1960年代になるとマズローやロジャースなどが、人間のポジティブな側面や自己実現、創造性などを強調した人間性心理学を提唱した。これは、人間の病的な部分のみを扱う精神分析と、人間を動物と同等に扱い人間性を見ない行動主義への批判から生まれた「第3の心理学」と呼ばれている。人間性心理学は、物質主義的で機械的な姿勢に異議を唱え、ひとりひとりを独自の存在として尊重する実存主義的な姿勢を持っていた。

後にマズローは、人間には超個の欲求があると考え、自己実現のあとの至高体験について研究するようになった。その流れで、1969年には人間の意識の超個のレベルについて研究する「トランスパーソナル心理学会」を設立した。トランスパーソナル心理学には、60年代に流行したヒッピー文化を含むカウンターカルチャーからの影響も強かったと考えられ、東洋宗教や神秘主義、シャーマニズムなども統合しうる心理学として発展していった。具体的には、至高体験やLSDなどによる変性意識状態の研究、サイコシンセシスなどの心理

療法、そしてウィルバーなどの理論家の研究が存在する。

人間性心理学では超個のレベルは扱わなかったが、行動主義への強い反発から客観的科学的方法論は忌避され、個人の独自性に注目し、個性記述的アプローチをとる。実際、マズローの論文もエッセイ形式が多く、実証的な論文は少なかったため、心理学全体に及ぼす影響は大きくはなかった。そして、その発展形であるトランスパーソナル心理学では、「心」を無意識や超個のレベルまで含むものと捉え、意識は自我を確立したのち超個のレベルに至るものであるとすることや、ウィルバーにより精神分析学派のユング・ノイマンの無意識構造をさらに精緻化する試みがなされていること、ウィルバーの方法論は科学的客観的なものではなく哲学的思索であったことなどから、この流れはプラトンのものと言えるだろう。しかし、このプラトンの流れはアリストテレス的心理学が主流である当時の心理学界の風潮とかけ離れており、次第に正統派心理学とは見なされなくなっていく。

これに代わって90年代末には、同様に人間心理のポジティブ面を研究するポジティブ心理学が生まれた。ポジティブ心理学は、その代表的な研究者チクセントミハイもマズローの至高体験や変性意識状態に類似した「フロー体験」という概念を提唱しているように、マズローの影響を受けている。しかし、人間性心理学・トランスパーソナル心理学と大きく異なるのは、自我のレベルを超えた超個の意識状態や無意識というものを対象としないこと、そして科学的客観的方法論を取ることである。

90年代末から2000年代、とくに2010年代以降は、臨床心理学の研究や心理療法の分野においても、精神分析をはじめとする「プラトンの潮流」の評価はエビデンスが軽視されているということで低くなっていった。丹野（2001）によれば、イギリスの臨床心理士は、心理臨床の専門家として学士の後3年の博士課程での訓練がなされるが、そこでは科学者—実践家モデルが徹底して採用され、主に教えられるのは、心理療法の中でも「アリストテレス的潮流」と言える認知行動療法となっている。日本でも、90年代末までは人間性心理学のロジャースによる来談者中心療法と精神分析が主流だったが、それ以降は認知行動療法などの様々な心理療法が存在する「多元時代」になっており（東畑,2022）、ロジャース派やフロイト派はその一部を占めているに過ぎない。

6.心理学史における方法革命・認識革命とアリストテレス的潮流・プラトンの潮流

ここまで、古代ギリシャ哲学から現在までの心理学における「心」の概念とその方法論の変遷を見てきたわけだが、高橋（2016）は、心理学の歴史は方法革命（方法論の革命）と認識革命（「心」の概念の革命）の繰り返しであると述べる。第1次方法革命は、ヴェントの実験心理学による科学的手法の取り入れ、第2次はゲシュタルト心理学による現象学的実験の取り入れである。高橋によれば、より心理学にとって本質的に重要なのは認識革命であり、第1次認識革命はデカルトによる「自我の発見」と「物心二元論の誕生」から内観心理学までの流れ、第2次は行動主義によって主観的内観世界が排除され「行動」のみが分析の対象とされるようになったことである。そしてこれによって、心理学は近代科学の仲間入りを果

たしたとする。

著者も、本質的な大きな転換点は以上の2回の方法革命と認識革命だと考える。だが、これは「アリストテレス的潮流」つまり、科学的心理学を主体に見た場合の捉え方であって、本論文で見てきたように、行動主義革命以降、精神分析から人間性心理学・トランスパーソナル心理学という「プラトンの潮流」の繁栄と没落という歴史も存在する。この90年代末のトランスパーソナル心理学の没落とポジティブ心理学の誕生、さらには来談者中心療法・精神分析の評価の低下と認知行動療法の発展によって、完全に正統派心理学から「無意識」や哲学的思索・思想が排除されたと言えるだろう。この出来事は、アリストテレス的心理学から見れば瑣末なことかもしれないが、正統派心理学が「科学的なもの以外は完全に排除するという方向性に向かうこと」を決定づけた大きな転換点だと考える。

IV ニューソロジーと構造主義的超越論的無意識研究の変遷

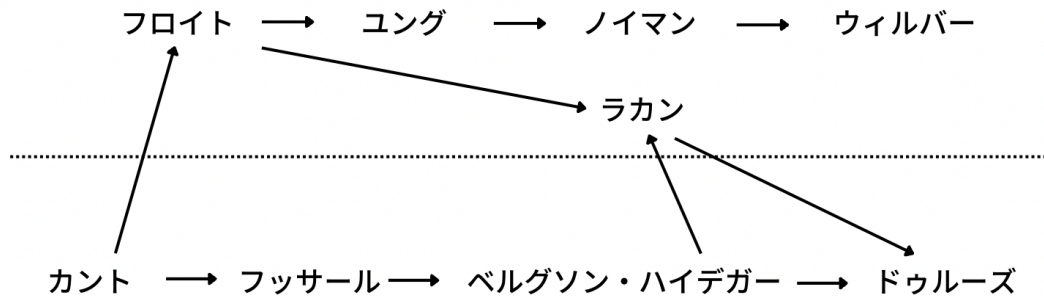
以上で心理学史における「心」の概念と方法論の変遷の整理が終わったのだが、本論文の第1の目的はこの心理学史の中でニューソロジーの位置付けを明確にすることである。そのためにはまず、ニューソロジーにおける「心」の概念と方法論を述べておかななくてはならないだろう。

ニューソロジーは、はじめに述べたように、超越論的な無意識の構造を明らかにすることを目的にしている。つまり、人間の意識や意識を基盤とした感覚・認識・思考・感情・行動などを成立させる、さらに大元の無意識構造が存在すると考えるのである。このような意味では、プラトンの「イデア」と類似したものを追求していると言えるが、プラトンと大きく異なるのは、現代物理学、とくに量子力学との接続を試みている点である。ニューソロジーにおいては、「心」とは「素粒子構造そのものである」と考える。具体的には、物理学で素粒子を表すときに使用する複素空間の虚数で示される場にベルグソン由来の持続概念としての「心」を対応させている。そして、この素粒子構造は、自己一人で成り立つものではなく、必ず「自己と他者」という双対の「心」の存在によって成立するものだとしている。このような「心」と「素粒子構造」の対応については、物理学的にもある程度の裏付けが取れている(半田・砂子,2001;半田・福田・大野,2017)。

ニューソロジーのような立場の研究はこれまでの心理学を含むすべての学問においても類を見ないが、「心」を成立させている超越論的無意識を構造主義的に明らかにするという研究は、心理学では「プラトンの潮流」である精神分析のフロイト、ユング、ノイマン、ラカン、そしてトランスパーソナル心理学のウィルバーがあげられる。また、哲学においても、カント、フッサール、ベルグソン、ハイデガー、ドゥルーズなどの現象学から存在論への流れが、この超越論的無意識を研究している。

構造主義的超越論的無意識
研究の系譜

心理学



哲学

図1.構造主義的超越論的無意識研究の系譜

Ⅲの3で述べたように、フロイトはカントからかなり影響を受けており、ラカンもハイデガーの「物」の概念から影響を受け（ラカン,2002）、ドゥルーズもラカンを参照しているが（ドゥルーズ・ガタリ,1986）、これらの研究者は同じものを異なる角度、方法論で追求しようとしていたのではないかと考えられる（図1参照）。本論文では、このような研究を「構造主義的超越論的無意識研究」と呼ぶこととする。

そして、ちょうど人間性心理学・トランスパーソナル心理学が興隆した60年代から90年代末は、思想的にもラカンやドゥルーズの研究が流行し、哲学と物理学の融合による超越論的無意識構造の明確化が試みられていた。著者は、このような心理学・哲学両分野にまたがる「プラトンの潮流」の流行は、世界的に広がっていたカウンターカルチャーの影響が大きかったと考える。実際、80～90年代にかけて流行したポストモダニズムによって「ある1つの真実（構造）がある」という思想が批判的となり、さらに95年のソーカル事件によって科学的データ至上主義の方向に社会的な風潮が一変すると、「プラトンの潮流」は哲学・心理学の両分野の正統派から徐々に姿を消すこととなった。

以上のように、ヌーソロジーは、心理学においては「プラトンの潮流」である精神分析とトランスパーソナル心理学の系譜を継ぐものである。その中でも、フロイトとラカンの影響を色濃く受け、その流れをさらに精緻化することを目指している。より厳密に言えば、ヌーソロジーは、哲学・心理学にまたがる「構造主義的超越論的無意識研究」の結果と物理学による素粒子構造の研究結果をすり合わせることによって、素粒子構造の中に超越論的無意識構造を読み解く概念を見出すことを試みている。現在、方法論としては哲学的思索がメインではあるが、これは現代物理学において発見されたゲージ対称性など、高次の空間構造の解釈をもとにしているものであるため、従来の哲学的思索のみを使用する研究とはタイプがま

まったく異なると言えるだろう。

また、以上のことから、ヌーソロジーはソーカル事件で批判された哲学と物理学の融合の手法を使用していると批判される可能性もある。しかし、ソーカル事件でとくに批判されたラカン、自身の概念の説明に記号的に数式を使用していたのみであり、同様に批判を浴びたドゥルーズは微分概念に哲学的な意味付けを行っていたが、その意味合いは数学的には曖昧なものだった。したがって、素粒子構造における虚数の場に「心」を対応させ、その全体を超越論的無意識構造として読み解くというヌーソロジーの手法は、上記の二人の手法とはかなり異なっている。ソーカル事件では、哲学・思想に出鱈目な数式を盛り込んでも誰も分からないということが批判の理由とされたわけだが、ヌーソロジーでは、素粒子構造を記述する膨大な数学的・物理学的研究成果を、同様に膨大な「構造主義的超越論的無意識研究」の成果と整合性をとりながら統合する作業であるため、こじつけやでっち上げは起こりにくいと考えられる。

V 心理学とヌーソロジー研究の展望と可能性

1.ヌーソロジーにおける心理学研究の方法論

ヌーソロジーは正統派哲学・心理学ではアウトサイダーとして扱われる「構造主義的超越論的無意識研究」の系譜を継ぐものである上に、物理学も加えた今までの学問には無いまったく新しいアプローチを行なっているため、なかなかアカデミックな世界には受け入れられづらい立場にある。しかし、このような学問的風潮の中でもヌーソロジー研究を進展させていくため、本論文の第2の目的であるヌーソロジーにおける心理学研究の方法論について考えてみたい。

まず、ヌーソロジーは先述した通り、哲学・心理学の「構造主義的超越論的無意識研究」の結果と物理学による素粒子構造の研究結果をすり合わせることによって、素粒子構造の中に超越論的無意識構造を読み解く概念を見出すことを目指しており、これが研究のベースとなっている。しかし、これは非常に抽象的・概念的な超越論的無意識構造のみの記述に留まるため、現実生活に根ざした自我レベルの現象と超越論的無意識構造との連結部分のシステムについては詳細な記述を行うことが難しい。したがって、ヌーソロジーにおける心理学の役割の1つ目は、ヌーソロジーの基礎理論である素粒子構造に基づく超越論的無意識構造をこれまでの心理学全般の知見に照らし合わせ、自我レベル以前と自我レベル、超個のレベルまでを一貫した意識発達仮説として提出することである。そして、2つ目は、この自我レベル以前から超個のレベルまでの意識発達仮説を、実験・統計処理などの量的研究と事例研究・面接法・観察法・グラウンデッドセオリーアプローチなどの質的研究を組み合わせ、多角的に実証していくことである。

2.心理学における第3次認識革命とヌーソロジー

最後に心理学の今後の展望と、心理学の発展にヌーソロジーが寄与する可能性についても考えてみたい。

高橋（2016）は心理学の今後の展望として、デカルトの物心2元論からはじまった心理学においては、物心2元論を超える第3の認識革命がゲシュタルト心理学者たちによって生じるのではないかと、それは「ある種の現象学と呼ばれてもしかるべきもの」ではないかと述べている。これは、現象そのものを見るという姿勢を持つことにより、物心2元論を超えられるという考え方であり、高橋はそのためには「哲学者と心理学者の共同作業」が必要であると述べる。また、渡辺（2019）は、高橋（2016）が明確にしなかった「ゲシュタルト心理学者による第3次認識革命」について、「ゲシュタルト心理学の営為の最も本質的な部分は現象学にあり、それも高橋がためらいがちに言う「ある種の」どころか、現象学そのものであると言ってよい」と述べている。しかし本当に「現象学と心理学の共同作業」のみで物心2元論が超えられるのだろうか。

ここで高橋（2016）と渡辺（2019）が使用する「現象学」とはフッサールの現象学だと思われる。しかし、フッサールの現象学は「超越論的」な姿勢によって、自我レベルの意識体験の構造と機能を明らかにするものであり、晩年には「不動の大地」というその意識体験の構造と機能を成立させる条件の存在について触れているが（フッサール, 1980）、それを明らかにすることはできなかった。その流れで、フッサールの到達できなかった意識の成立基盤を「存在」「物」と呼び、これについて研究したのがハイデガーである。ハイデガーによって哲学的に「存在」「物」の究極の意味が探られたわけだが、相対主義やソーカル事件の影響もあり、ドゥルーズ以降、それをさらに発展させようという研究者は見受けられない。フッサールが「不動の大地」と呼び、ハイデガーが「物」と呼んだものが超越論的無意識構造だと本論文では考えるが、カントもこれを「物自体」と呼んでいた。つまり、この「構造主義的超越論的無意識研究」の研究者たちの多くは、「意識」「心」を成立させているものが「物」だという直観を持っていたと言える。

そして、物理学でも「物」の最小単位である素粒子が発見され研究が進んでいるが、現在でもそれを表す虚数の意味や観測問題などを明らかにするまでには至っていない。物理学的に「物」を分析しても「意識」「心」の問題に行き着くため、哲学でも物理学でも「物」と「心」の正体の解明については壁にぶつかって長い間進めていないのが現状である。

著者は、物心2元論を超えることは「物」と「心」の正体が明らかにならなければ不可能だと考える。したがって、心理学が行動主義による第2次認識革命の延長の時代を乗り越え、物心2元論を超える第3次認識革命を迎えるには、高橋（2016）の述べるように「哲学者と心理学者の共同作業」だけではなく、そこに物理学者を加えた「物理学者・哲学者・心理学者の三位一体」が必要になる。この3者の共同作業の基盤を提供するのがヌーソロジーだと言えるだろう。

<参考文献>

- 池田知栄子 (2011) . 「フロイト再考」 『社会研論集』 Vol.18 ,p49-61.
- 梶原直美 (2010) . 「魂についてのオリゲネスの教説に関する一考察」 『神学研究』 Vol.57,p55-65.
- 工藤顕太 (2019) . 「欲望と享樂の倫理学：カント・フロイト・ラカン」 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』 64,p821-836.
- サトウタツヤ (2022.5) . 『臨床心理学小史』 . 筑摩書房.
- サトウタツヤ・森岡正芳・東畑開人 (2022.8) . 「心の学が立ち上がる時—心理学と臨床心理学の「発生」と「歴史」」 『心の治療を再考する』 p32-49.
- 高橋滯子 (2016) . 『心の科学史 西洋心理学の背景と実験心理学の誕生』 . 講談社.
- 丹野義彦 (2001) . 「展望 実証にもとづく臨床心理学に向けて」 『教育心理学年報』 第 40 集 ,p157-168 .
- 東畑開人 (2022) . 「反臨床心理学はどこへ消えた？-社会論的転回序説 2」 『心の治療を再考する』 p9-29.
- ドゥルーズ,G・ガタリ,F (1986) . 『アンチ・オイディプス』 . (市倉宏祐訳) . 河出書房新社.
- 半田広宣・砂子岳彦 (2001) . 『光の箱舟—2013:超時空への旅』 . 徳間書店.
- 半田広宣・福田秀樹・大野章 (2017) . 『シュタイナー思想とニューソロジー 物質と精神をつなぐ思想を求めて』 . ヒカルランド.
- フッサール,E. (1980) . 「自然の空間性の現象学的起源に関する基礎研究—コペルニクス説の転覆—」 『講座・現象学 3—現象学と現代思想』 p267-294.
- ラカン,J. (2002) 『精神分析の倫理』 上下. (小出浩之訳) . 岩波書店.
- 渡辺恒夫 (2019) . 「ゲシュタルト心理学と現象学—「立ち消えになった認識革命」からの出発」 『こころの科学とエピステモロジー』 創刊号, Vol1, p5-18 .
- Sigmund Freud, Das Ich und das Es (1923), in : Gesammelte Werke, Band. XIII, a. a. O., S. 263.